

## 移動ド唱法

田中千義

## A Study for Movable Do

Chiyoshi TANAKA

(Received November 15, 1996)

## はじめに

移動ド唱法は、筆者の学生（昭和33年迄）時代は当然の唱法、唯一の勉強法として、学校音楽の授業や音楽の専門的個人レッスンで行われていた。現在の学生はほとんどの者が固定ドで歌っている。大学入学試験に於ける新曲視唱は、近年大部分の学生が正確に歌えない。これは固定ドで歌う為に調号のシャープ・フラットを見落とし、或いは歌っている間に忘れてしまい何調であってもハ長調にして歌ってしまうからである。筆者の頃には固定ドで歌う者はほとんど居ないか、又は間違った事をしていられると思われた。移動ド唱法は多少の努力が要るが、しばらくの間移動ドに親しむと思って譜読みをしていれば、必ず少しずつ読めるようになるものである。学習者は当たり前の仕事だと思って練習を積んで欲しい。次に練習法を述べる。

ト長調 どの調でも高音部譜表の五線内に大体納まる位置にある主和音ド・ミ・ソを先ず覚える。次に下属和音のド・ファ・ラの位置を確認する。これらを繰り返し視唱したり黙読したりする。よく覚え込むまでには個人差も有り、どれ位の時間や日数が掛かるか分からないが、毎日数分ずつ練習するのがよい。この方法は疲れてやる気なくなるのを避ける為である。読譜練習し始めの頃は四・五日、一週間も練習しないとドレミの位置を早く確認出来なくなるかも知れない。覚えている事が消え去ろうとしているのである。倦まず弛まず毎日数分ずつでも練習するよう努力しよう。上記の主要三和音が大体覚

えられたら次は上第一間がドである事を覚える。これは直ぐ覚えられる。次はこの調で唯一特徴のあるシ、調号のシャープを記した第五線の音のシである。これはシャープの付いた高さの第五線なのですぐ覚えられる。残りは第一線上のラである。これは先に覚えたソの一つ上と思えばよい。以上簡単に書いたが、しばらくの間毎日階名で読譜練習を重ね下第一間のソから上第一間のドまでを確実に覚える。五線から離れた位置の音は、少しずつ練習を重ねて読み馴れるとよい。先ずは五線の第一線から第五線の範囲の音を早く言い当てられるようにする。

ヘ長調 先ずハ長調のファ・ラ・ドが主和音のド・ミ・ソである事を確認する。次はト長調と同じこの調の下属和音のド・ファ・ラである。ファは特にこの調の調号の付いた第三線で覚えやすい。次は属和音のシ・レ・ソである。シは主音ドの位置の一つ下なのですぐ覚えられる。レも主音ドの一つ上なのでこれもすぐ覚えられる。ソは特徴のあるフラットの付いたファの一つ上と思えば難しい事はない。第五線のドはヘ長調の主音ヘ音なのですぐ覚えられる。シはこのヘ音の一つ下である。下のソはハ長調のドの位置の下第一線でこれも早く覚えられる。一つ上の下第一間のラはト長調のソと間違えやすいので気を付ける。音符を高い音の方に向かってドレミファとつもって読んでいくのは楽でも、音の低い方に向かってドシラソとつもるのは初心者には少しやりにくい。これは最初に階名を習う時下方にドシラソとは学ばない。上方に向かってドレミファと楽譜を読み始めるからであろう。注意して五線の下方向への読み方を覚えねばならない。

\* 音楽科  
\*\* 教育学部

ト長調とヘ長調の階名はよく間違いやすい。初歩の間は、楽譜の左側を度々見て調号のシャープやフ

フラットを確認しながら読譜するとよい。シャープを見てはあれがシだからト長調、フラットを見てはあれがファだからヘ長調と再確認しながら読んでいく。それでも間違える時があるが、あまり気にしないで読譜していく。読譜の早道は他の勉強や習い事と同じで繰り返し少しずつ練習する事である。と言ってもコールユーブンゲンを毎日歌っても退屈してしまう「子供のためのソルフェージュ」等もよいが、童謡・小学唱歌等を集めた曲集の中からト長調（ホ短調）へ長調（ニ短調）の曲を選び移動ドで歌うとよい。このような知っている曲は歌いやすいし繰り返し歌えるので、練習している間に暗譜で移動ドで歌えるようになるのである。この二つの調が大体読譜出来るようになったら次にニ長調の練習に入る。

**ニ長調** この調の音階を五線譜に並べてみると当たり前の事だがハ長調の音階とでは音が一つずつ上にずれている。正攻法で只そのまま覚えていくのが難しいと思う人は、ハ長調とのずれを利用する。つまり音の一つ下の階名、ハ長調で言うレの音は一つ下のドと言う。ミはレと言うのである。このように常に一つ下の音と言う練習を重ねる。そのうちにこの調の主要三和音を早く言い当てられるようになり、ついにドレミの位置を覚えてしまうのである。勿論正攻法で覚えられればそれにこした事はないのであるが。次は変ロ長調である。

**変ロ長調** この調は前記のニ長調と同じ要領で一つ上の音を、つまりハ長調でいうシをドと言うのである。目を一つ上の音一つ上の音と次々に移して言っている間に変ロ長調の本当の読譜が出来るようになるのである。素早い目の動きで音符を一つ上に読むのである。歌う時は始めはなるべくゆっくりしたテンポで階名を言い間違えないように練習する。初めからそのままに読めるようだと一番良いのであるが、この方法も一つの学習法である。この方法だとニ長調と混同する時があるかもしれないが根気よくやっていくうちには、正しい音の位置を言えるようになるものである。言い間違いをあまり気にせず練習を積むとよい。次はイ長調である。

**イ長調** 五線譜の第二間、ハ長調のラの音が主音であることをよく覚える。主和音のド・ミ・ソは第

二間・第三間・第四間と見やすい。ファ・ラはしっかり覚えたミ・ソの夫々の一つ上である。ハ長調のシ・ドはラから一つ上がこの調のレ、二つ上がミとこれは読みやすい。シは主音の一つ下と思えばよいのである。勿論低音部記号を見馴れているピアノを弾く者や合唱の男声部を歌う者にとっては、五線譜上の音の位置が全く同じなので、練習なしで読める調と言うことになる。上記の経験のあまり無い者は、練習のし始めにシをシと言えないで主音のドの位置は覚えていたので、ドから一つ上であわてて思わずドレと言ったり、ドから一つ下のシがとっさに口に出なくて思わずドシと言ってしまうりするが練習を積むうちには、ドは頭の中で言った事にして一つ上はレ一つ下はシと言えるようになる。しばらく練習している間にはドレミの位置を素早く正しく言えるようになるのであるから、練習初期の頃に難しいと早々に諦めてしまわないようにせねばならない。しばらく辛抱して練習を続ければ誰にでも出来るようになるものである。どうしても出来そうにない時は、所々片仮名でファとかラとか楽譜に書き込んでおいて歌う方法を取る。なるべく我慢して主音から遠い音だけ書き込むようにするとよい。主音に迄ドと書き込まない。残りはホ長調である。

**ホ長調** 第一線が主音である。先ず主和音ド・ミ・ソと上の第四間のドを覚える。第一線から始まる音階なので視覚的に見やすいつもりやすいと思う。

以上ここ迄練習して来るとハ音記号の譜表も練習した事になる。ソプラノ記号はホ長調と同じ、アルト記号は変ロ長調と同じ、テノール記号はニ長調と同じ、バリトン記号はヘ長調と同じ読みである。読みの同じ調は次の通りである。ニ長調と変ニ長調・ホ長調と変ホ長調、ヘ長調と嬰ヘ長調、ト長調と変ト長調、イ長調と変イ長調、ロ長調と変ロ長調。

### おわりに

移動ド唱法は少し努力を要するので、少しずつ調に馴れるようにする。基本的にはコールユーブンゲンで学習するのがよいが、どの調でも少し五線譜に書いてみると早く覚えられる。和声学、作曲に是非必要なので音楽家を志す者は当然の勉強として努力して欲しい。